

2023. 2. 26. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書17章1～4節
『赦し合う関係』

わたしたちはこの一週間、どれだけ多くの事を赦したでしょうか。ささいな人間関係から始まって、様々な赦すべき課題がひっきりなしに産み落とされます。もはや赦すということはわたしたちの日常生活の一部といっても差し支えない程に溢れかえっているように思えてしまいます。挙げ句の果ては、もう面倒くさくなってしまい、出来るだけいろいろな事に関わらない、放っておく方が良いのかと考えてしまうくらいです。どうしたものかと思えます。

本日の聖書の箇所、ルカは当時の初代教会内部の日常的な課題を描き出してゆきます。この記事はルカがよく使う「教育的プログラム」の一つです。

ご存知のように、初代教会とはその構成員に病い・障がい・職業的、人種の差別・高齢者・女性・経済的困窮者が占めておりました。彼ら・彼女らの状況は千差万別です。共通するのはおそらくひとつだけでした。それは「わたし」を「ありのまま」受け入れてくれる社会はこの世界にはないということだったかと思うのです。そんな被虐的な思いのうちに初代教会の門を叩いたということでしょう。

初代教会に初めて入った人は驚いたといいます。なぜなら、そこには透徹された受入れがあったからです。受入れとは施設設備の充実なんかではありません。そのような環境はまだまだ劣悪なものであったと考えられます。そうではなく、初代教会には「ありのまま」の「わたし」が文字通りありのまま暮らせる不変と超然があったのです。多分、入ったばかりの人は自分の身の不遇を嘆き、周りの人たちに感情をぶつけたり八つ当たりもしたことでしょう。けれども、その人がどれだけ迷惑をかけようが、初代教会は赦すことにおいて不変であったし、その人の過去や性格や噂からも超然たりうるものであったのです。

この不変と超然、これを自由といいます。そしてこの自由こそが赦しのいのちなのです。

ルカは1節で「つまづき」という用語を使います。つまづきとは「獣を捕らえる

罨」を意味します。罨を仕掛けるためには獲物をよく知る必要があります。しかし、ルカは「人」とは罨を仕掛ける対象ではなく、赦す対象であると述べるのです。「一日に七回」(4)と書かれますが、これは一日に何度でもという表現です。そして、人をよく知るとは愛するという他に他ならないとルカは宣言するのです。

初代教会に入った人はこのようにして「わたし」が赦される存在であることを徐々に知って行きました。それも道徳的・教義的赦しなどという机上の空論なんかではなく、今まさに共に生きる仲間として互いに赦されていることを分かち合うが如くに知ってゆくのです。ありのままの自分が赦されていることを知る時、人は初めて喜びと感謝に満ちた新しい人生を垣間見ることに至ります。そして、今度は自分が他者を徹底的に赦すことの出来る者へと育まれてゆくのです。

わたしたちはどうでしょうか。赦してもらえないと苦言を呈し、いじけたり、すねたり、恨んだりを繰り返してはいないでしょうか。

ルカは7章47節で「赦されることの少ない者は、愛することも少ない」と語ります。まず自分が赦されていることを知る時、愛する者へと招かれて行くことを知りたいと願うのです。